



〈資料〉伯林商科大学経営學研究室の組織及經營

平井, 泰太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 35(6):941-948

(Issue Date)

1923-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053613>



資 料

柏林商科大学¹⁾ 經營學研究室の組織及經營

(Die Organisation und der Betrieb des Betriebswirtschaftlichen Seminars des Herrn Prof. Nicklisch, an der Handelshochschule Berlin.)

平 井 泰 太 郎

序

獨逸に於ける商學研究最近の傾向は、所謂經濟學に基礎を置く私經濟的研究、或は、商業に關する知識及技術の綜合たる商業學より移つて、經營概念よりする經營學の理論的及技術的なる研究を試みんとしてゐると云つて過ちではあるまい。數個の大學に於ける經濟的及社會的學部²⁾ (Wirtschafts- und sozialwissenschaft. Fakultäten) 及、各商科大學¹⁾ (又は、高等商業學校 (Handelshochschulen) に於て、商業學、又は私經濟學なる講座が恰んと其の跡を立ち、系統的なる經營學 (Betriebswirtschaftslehre) としての講義並びに研究が行はれてゐることは、著しきものがある。現今商學研究の目標は、恰んど、經營學として統一せられ來つたと云ふことができるであらう。

ケルン(ライン)に於ては、Schmalenbach 及び Prion の兩教授、フランクフルト(マイン)に於ては Schmidt 及び Pape の兩教授、ベルリンに於ては Nicklisch 及び Leither の兩教授、(他の各大學省略) 主任教授としてこれに當り、組織的なる研究を行つてゐる。

自分は、幸にも在外研究を機會として、親しく各研究室に客員として參加することを許された。茲に其の一例として伯林大學經營學研究室の組織及經營の一斑を傳ふことは無益ではあるまいと思ふ。伯林商科大學に於ける經營研究室は、前述する如く Nickisch 及び Jaehner の兩教授を中心として、自ら二個の研究室をなしてゐるのであるが、前者に就て報告をしようと思ふ。蓋し、其の研究室の組織的なる事に於て、ケルンの Schmahlenbach 教授の研究室と共に、二個の代表的なるものと考ふるからである。

註

1) Handelshochschule の譯語は、商科大學を正しとするが、高等商業學校を正しとするかに就ては、自ら議論があるであらう。惟ふに、入學者其の他の取扱ひより見る時は、前者を正しとするであらうし、學年々限及學士號の點より見る時は後者を近しとするかも知れない。其の組織或は、現に、ハルリンを主とする各校に於て、商學士號を問題としてゐる點より考ふる時は、譬へば、專政部を除きたる東京及神戸の舊高等商業學校、或は昇格以前に於ける早稲田、慶應等の各大學に微々類似したる地位を持つてゐると云つても良いかも知れぬ。然し、日本に於て近來、これを商科大學と稱する習慣ができたやうであるから、これに従ふことにする。

2) 此の學部を經濟的及社會的學部と稱することに就ても異論があるであらう。然し、此の學部は、其成立の歴史に於て Handelshochschule を改造したるものに係り、且、その Wirtschaftliche なる文字は、所謂、經濟學なる意味ではなくて、Volkswirtschaftslehre und Betriebswirtschaftslehre を含めたる Wirtschaft の意味であると考へられるのである。(Nickisch 其の他に依る)假りに、此の譯語を用ふることとした。間違つて居れば御教へを乞ひたいものである。

一 設 備

伯林商科大學に於ける Nickisch 教授の研究室に於ては、教授の外、Dr. Hummel, Dr. Schmaltz, Dip. Kfm. Schuster の助教授及助手級の外、一二の商業得學士(Dip. Kfm.)及其の他の私助手及男女事務員がこれに従事してゐる。大學生にして助手を命ぜられたる場合もある。

研究室其者の設備としては、各研究室一般圖書室と連絡を保つて、其以外に研究室圖書を有する

外、資料として、新聞切抜及各銀行會社營業報告課狀其の他を蒐集し、閱覽の便宜をも與へてゐる。

研究室其の者の公表としては、他の大學教授の協力もあるのであるが、此の研究室が主となつて『商學雜誌』(Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis)の月刊を編纂することの外、爲替及物價に關する報告其の他を毎月若干發表してゐる。

二 演 習

演習は、教授、助教授其の他に於て組織的分括を行つてゐる。豫備演習室(Vorseminar)は、現今(一九二三年)教授に代つて Dr. Hummel の指導する所である。一學期(半年)を以て一期とし、Nietzsche 教授の「經營學」³⁾を主題として、系統的なる豫備知識を與ふことを目標としてゐる。

註 3) 著書としては現在 „Wirtschaftliche Betriebslehre“ 6. Aufl. 1922, „Organisation“ 2. Aufl. 1922 其の他もある。

主研究室(Hauptseminar)は、教授自ら(助手として Dr. Hummel)指導する所である。每週一回開蕙せられる。

分研究室(Übungen und Arbeitsgemeinschaften)は、教授統括の下に、各助教授及助手が指導する。每週一回、又は隔週一回開蕙せられる。各、分研究室に依り異なる。

特別研究室は、教授の特に指定したる者のみに限り、高度の講義及指導が行はれる。一九二三年夏學期に於ては『組織論』が行はれた。但し、これは、自ら一般學生に關する所が少ない。

最近(一九二三年夏學期)に於ける、主、分、各研究室、補導者及、其正參加人員は左の如くである。(聽講者を除く。因に、同學期伯林商科大學正學生數は男子約三千人、女子約六百人である。)

豫備研究室(i. V. Dr. Hummel)

二一〇

主研究室 (Prof. Dr. Nickisch)

三三〇

外國貿易研究室 (Dip. Kfm. Schuster)

五〇

相場及貸借對照表研究室 (Dip. Kfm. Schuster)

四五

手職、經營研究室 (Dr. Schmalz)

不明

分研究室

勞働組織研究室 (Dr. Schmalz)

三五

商品市場研究室

(Dr. Schmalz, Dipl. Kfm. Schuster)

八

事務組織研究室 (Dr. Hummel)

二五

廣告研究室 (Zorebber)

八

分研究室の設定は、必ずしも科學的系統を以て選ばれたものではない。其主たる目的は、云ふ迄もなく、主研究室に於ける研究の補助として、研究團 (Arbeitsgemeinschaft) を作るのであるが、數字にも現はるゝが如く、特に、現在の伯林商科に於ては、經營學研究室に所屬することを希望するものが多い。一には、戰時中に於て研究のできなかつた結果であるが、更に、戰後の時局に影響せられた事も少くない。此の希望者を全部收容する事は不可能であるが、收容拒絕は、これが解決策ではない。そこで、教授元來の希望たる科學的分研究室の方針に加ふるに、希望者の歸趨、其の他を參酌して、選ばれたものである。

研究所屬員は、研究並びに報告の義務を負ふ。報告は、主分各研究室に於て行ふ。口頭にて行ふものは、豫め(約一週)草稿の提出、指導者の校閲を経る。演習開筵の後には、討論並びに指導者の批判と共に、更に選ばれたる所屬員に依て、筆記せられ、其の第二次報告は、次回に朗讀増訂せられたる後に、研究室記録として出席者の署名と共に保存せられて、研究室資料となる。特殊の問題に

就ては、分擔せられた文書で、報告せらるゝ事もある。報告が、特に公刊せらるゝ事もある。

研究室に於ては特に見學が行はれる事がある。最近に於ては、ライプツヒの春期國際銘柄市、及びハンブルヒの港灣及商工大經營の參觀(四日間)が行はれた。更に各分研究室に於ても、必要に應じ見學が行はれる事がある。

三 題 材

題材の選定は、指導教授及輔導者其の他の腹案に依り、每學期の始めに於て、教授に依て決定發表せられ、報告者分擔者等の決定がある。政策の問題に就ては、時局に依ることが尠くないのは云ふ迄もない。一九二三年夏學期(自四月中旬至七月底)に於ける、主、分、豫備各研究室に於ける題材を掲ぐれば左の如くである。各項目は、凡そ、各開筵ジツツンに於て取扱はれたものである。

イ 豫備研究室

第一部 總說 (一) (a) 研究方針、研究方法、參考書。 (b) 經營學の範圍並びに他の學科との關繫。 (二) 經營學の基礎。

第二部 報告並びに討論。 (三) 「企業」及經營の概念。形態。法規並びに設定。 (四) 「簿記及會計」の問題、系統、方法及理論。 (五) 貸借對照表の構成、編制、種類。 (六) 貸借對照表の財産評價。 (七) 原價會計。 (八) 其の理論。目的。基礎及要素。 (b) 企業の種類に依る若干の問題。 (八) 「償却及準備」。 (九) 「企業内の價值移動及取引量」。 (十) 「收益率會計」。 (十一) Nicklisch 教授の「組織」及其「經營學」との關繫。 (二) (a) 企業内の勞働及其組織、理論。 (二) (b) 經營組織。 (c) 勞働時間及仕事。 (d) 勞働組織。 (四) (e) 仕入組織。

ロ 主研究室

(一) 棚卸評價の理論。 (a) 經營論上、 (b) 稅務論上。 (二) 經營基礎財産。 (a) 經營論上、 (aa) 商工經營、 (bb) 農經

營、(b)稅務論上。(三)價值構成理論の問題。(a)一般理論及其技術。(b)爲替市場。(c)證券市場(自己株式の價值保有に對する發券業務政策)。(d)商品市場。(四)價值保有債券。(a)一般論、(b)特殊價值保有債券及其の内部關係。(五)經營内に於ける價值保有債券。(a)經營内の金融策上。(b)貸借對照表上。(六)金値保存貯金。(七)金値プレミアム。(八)工企業に於ける原料需給の保全。(九)貨幣價值變動の際に於ける積立の設定。(一〇)組織學の問題。

ハ 分研究室 (次第不同)

(A)外國貿易研究室 (一)戰前及戰後に於ける獨逸貿易及支拂の均衡。(二)輸出入貿易の進展、意義及組織。(三)外國貿易に對する經濟的情報の意義。(四)外國貿易の仲介者としての展覽會及銘柄所。(五)外國貿易に於ける支拂取引。(六)商事仲介裁判。(七)獨逸に於ける商品及農業取引所の組織。(八)現今に於ける外國貿易の管理。(九)委託業務及其の技術。(一〇)契約書の意義及内容。(二)東亞との積送業務。(三)仲介者を通ずる輸出貿易の取引。

(B)相場及貸借對照表研究室 (一)研究方針。(二)取引所の進展及組織。(三)取引所内に於ける證券取引の種類(四)特殊問題。(五)相場表の進展、形態及種類。(六)取引所に於ける注文及履行。(七)銀行の發券業務。

註 此分研究室に於ては、冬學期に於て繼續して貸借對照表研究が行はれる。從て此の題材は、相場に關する部分である。

尙、各所屬員は、各自一會社を擔當して、相場及對照表的研究の報告書を提出する義務を負ふ。

(C)手職經營研究室 (一)研究方針。(二)商工小經營學の問題。(三)手職經營及其問題。(a)財産の設定及種類(b)形態。(四)手職經營の技術。(a)勞働の技術。(b)合理的仕事。(五)商工小經營の金融及資本。(六)手職經營の簿記及會計。(七)工場及手職經營の比較經濟論。

(D)勞働組織研究室 (一)研究方針。(二)(a)生産工程經營論、(b)生産工程經營論の種類及問題。(三)科學的經

管理論。(四)經營要素としての人。(五)能率。(六)原價問題。(七)科學的經營法と收益との關係。

(B)商品市場研究室

(一)研究方針。(二)商品市場の理論。(三)伯林、倫敦及紐育に於ける商品市場及其の需

給裁定上の意義。

(四)特殊問題。(五)爲替變動の危險對策。(六)戰後に於ける獨國銀行の爲替政策。

(F)事務組織研究室

(一)研究方針。(二)事務管理に於ける謄寫具の利用。(三)經營内に於ける書式の發達。

(四)經營内に於ける計算機の利用。(五)カード。(六)大經營に於ける文書の組織及分類。

註 此分研究室に於ては、其の性質上、特に、事務組織の見學が度々行はれる。此の種の實務的研究が特に、要求せらるゝ

理由は、學生の内に、現に實務に従事せるものが多いからであらうと思はれる。此點は日本に於ける學生と比較して異なる點の一つであらう。

(G)廣告研究室 此分研究室に於ては、特に題材の設定は行はれない。蓋し、補導者が、實務家であるからであらう。

二 附、一九二二—二三年各學期に於ける主研究室題材要目。

伯林商科大學に於ては一年は夏冬兩學期を以て成立つ。從て、兩學期は獨立はしてゐるが、自ら關聯する所があると思つてよからう。然るに、一九二三—二四年冬學期研究室題材に未だ決定を見ないから、便宜の爲めに、且つ、煩を避くる爲めに、主研究室に於て一九二二—二三年冬學期(自十月末至二月末)に行はれた題材の要目を參考として次に掲げることゝしやう。

(一)概觀(a)一九二二年八月以來の獨國銀行月報(ライヒス)の展開。(b)爲替相場及株式相場。(c)生計費及勞銀指數。(d)外國貿易の趨勢。(二)金値計算其他に依る物價設定。(三)物價保全。(四)勞銀設定。(五)量的計算。(六)勞働時間及仕事。(七)貨幣價值變動の保險業に及ぼす影響。(八)自己保險。(九)金値貸借表。(一〇)相場變動。(二)爲替業務の管理。(三)銀行委託の現状。(三)貨幣價值變動の影響。(a)税法上。(b)財政上。

跋

此報告が些少たりとも、何等かの意味に於て、本邦經營學界に參考になれば幸甚である。Nicklich 教授の經營學の理論的建設に對する不斷の努力に對して深甚の敬意を表する。